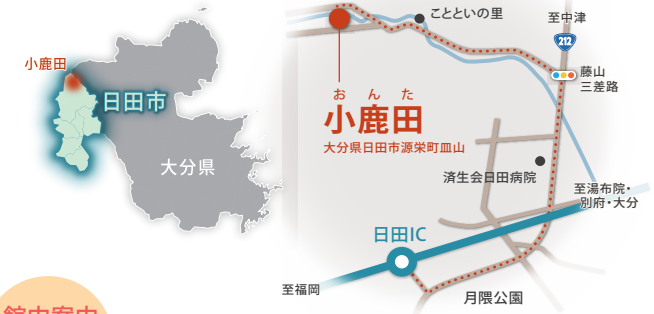
池ノ鶴の棚田

アクセス

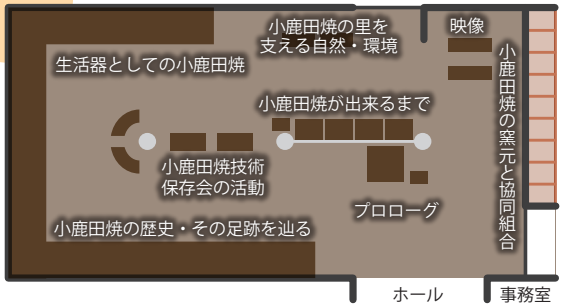
■日田市街まで

福岡市から　●JR鹿児島本線・久大本線特急で1時間10分
　　●高速道 大宰府I.C.50分
久留米から　●JR久大本線特急で40分
大分市から　●JR久大本線特急で1時間40分
　　●車で1時間10分

■JR日田駅から皿山まで車で30分
■日田I.C.から皿山まで車で25分



館内案内



開 館 時 間	午前９時～午後５時
休　館　日	水曜日、年末年始（12/29 ～ 1/3）

お問い合わせ先

日田市立小鹿田焼陶芸館
〒877-1121
大分県日田市源栄町138-1
TEL/FAX 0973-29-2020
E-mail　onta@hita-net.jp

日田市教育委員会文化財保護課
〒877-8601
大分県日田市田島2丁目6-1
TEL 0973-24-7171　FAX 0973-24-7024
E-mail　bunka@city.hita.lg.jp

国選定重要文化的景観

小鹿田焼の里 案内図

窯元　唐臼
小鹿田焼陶芸館　その他
登り窯　道路　河川

コ 坂本庸一窯
ヤ 黒木史人窯
カ 黒木昌伸窯
サ 柳瀬裕之窯
イ 坂本浩二窯
ヤ 坂本健一郎窯
ヤ 柳瀬元寿窯
ヤ 坂本工窯
ヤ 小袋道明窯

小鹿田焼の歴史

小鹿田焼のはじまり

小鹿田焼は、桃山時代（16 世紀末）に渡来した朝鮮人陶工による技術が、筑前高取系の小石原窯（現 福岡県朝倉郡東峰村）を経て、現在の大分県日田市大字鶴河内字皿山に伝えられたものと考えられています。

江戸時代中期（18 世紀）、小石原の陶工 柳瀬三右衛門は、日田郡鶴河内村柳瀬（現 日田市）の黒木十兵衛の資金提供のもと、同じく鶴河内村（字）小鹿田の坂本家から土地提供を受け、この皿山地区に開窯します。

開窯から三百有余年、現在もこの三家につながる人たちが、当時からの技法を受け継ぎ、窯の火を守ってきています。

小鹿田焼の歩み

小鹿田焼の里であるここ皿山地区では、現在、9軒の窯元が家族労働のみで作陶を行い、江戸時代から変わらぬ伝統的技法により、独自の作風を守り続けています。

昭和4（1929）年に、民藝運動の創始者である柳宗悦は、福岡県久留米市の陶器屋にて、ここ皿山で作られた陶器を見て、その2年後に来窯し、紀行文「日田の皿山」を著し、大戦を挟んで昭和 29（1954）年には、世界的に有名な陶芸家バーナード・リーチが来窯。彼らが著した書物などにより、「小鹿田焼」は全国的に知られるようになりました。

小鹿田焼は、昭和 45（1970）年には文化庁により「記録作成の措置を講ずべき無形文化財」に選択され、その 25 年後の平成7（1995）年に国の重要無形文化財に指定され、小鹿田焼技術保存会は保持団体として認定をされました。

柳　宗悦

バーナード・リーチ（右）

小鹿田焼の特徴

地元にある土、水を使う

陶土は、皿山地区で採取される土を、川の水を利用した唐臼で粉砕し、手作業で水簸・乾燥して作られる。

蹴轆轤（けろくろ）を使う

器は、足で回す蹴轆轤を用いて形作る。

登り窯（のぼがま）で焼く

窯焚き（焼成）は、薪を使って登り窯で行う。

伝承された方法により装飾

釉薬・白化粧土は伝承された方法にて調製し、模様付けは伝承された技法を用いる。

小鹿田焼の代表的な技法

打ち掛け

釉薬を柄杓に汲み、器に勢いよく掛ける。

流し掛け

スポイトなどを用いて、器の胴部に縦に流れるように掛ける。

飛び鉋

弾力性のある金属の鉋などで、削り目を連続的につけ文様を施す。

打ち刷毛目

成形直後に、刷毛を使って化粧土で連続的に濃淡をつける。

指描き

白化粧土が乾かないうちに、指で文様を描く。

櫛描き

木などで櫛状の道具を作り、波状や緩やかな曲線や、直線などの文様を描く。

小鹿田焼ができるまで

自然の力と人の手が生み出す小鹿田焼、工程ひとつひとつに独自の工夫があります

原土の採取

陶土の原料となる土は、皿山地区内で採取。

唐臼（からうす）による原土の粉砕

乾燥を終えた原土は、水力を利用した唐臼で粉砕。20～30日ぐらいかけて粒子状にする。

水簸（すいひ）

粒子状にした原土は水を加えカワボウで撹拌。できた泥水はふるいで何回も濾す。

水抜き

濃縮した泥水を「オロ」と呼ばれる濾過槽で水抜き。さらに、天日や窯の上で乾燥させると陶土が完成。

成　形

成形には蹴轆轤を使用。作品の大きさ等により「引きづくり」、「玉づくり」、「紐づくり」の３つの手法を用いる。

乾　燥

成形が終わった大小の器はサライタに乗せ、「ツボ（前庭）」で天日乾燥する。

白化粧土による装飾

伝統的な装飾として「刷毛目」、「指描き」、「飛び鉋」、「櫛描き」などがあり、蹴轆轤を回転させながら装飾を施したりするものが多い。

釉薬による装飾

伝統的な装飾として、器に柄杓でかける「打ち掛け」と、器の胴部に縦に流す「流し掛け」が、代表的なもの。

焚き物（薪）の準備 登り窯による焼成

窯をあたためるための薪には古材を使い、焼成に使う薪は主に杉の端材を使う。
焼成には登り窯を用いる。火を入れると、共同窯では約55時間、夜通し焚き続ける。